

# ファースト・フォリオ(1623)の扉表紙に印刷された シェイクスピアの名前(“MR. WILLIAM SHAKESPEARES”) の“MR.”はどう訳されるべきか

五十嵐 博久\*

## 1. 問題の所在

シェイクスピアの死後7年が経過した1623年にシェイクスピアの芝居36本を収録して刊行された作品集——いわゆる「ファースト・フォリオ」——には、現代の感覚でいう正式な「標題」はない。より正確にいうと、ファースト・フォリオには「標題」が二つあって、一つは扉表紙の標題で、“MR. WILLIAM SHAKESPEARES COMEDIES, HISTORIES, & TRAGEDIES” というもの、もう一つは前付けの最後にある「主要な役者名」が印刷された版面の“The Workes of William Shakespeare, containing all his Comedies, Histories, and Tragedies” というものである<sup>1</sup>。扉表紙の標題を付けたのは、この本の製作を取り仕切った二人の出版業者(エドワード・ブラウントとアイザック・ジャガード)である<sup>2</sup>。もう一つの標題は、この本の製作に協力した国王一座の役者たち(ジョン・ヘミングズとヘンリー・コンデル)によるものであると推定される。この不一致が生じた理由は分かっていないが——当時の本では珍しくない——、「主要な役者名」の版面に見える標題を付けたと推定される役者たちは、一座が所有していた「シェイクスピアの著作(Workes)」の名に値する「すべての喜劇、歴史劇、悲劇」の原本と、それらの上演にかかわった主要役者名を付した「標題紙」の原稿を出版業者

\* 人間科学総合研究所研究員・東洋大学食環境科学部

<sup>1</sup> 本稿におけるファースト・フォリオからの引用は、すべてノートン・ファクシミリ(The Norton Facsimile)版(第2版)による。

<sup>2</sup> 1623年11月8日、エドワード・ブラウントとアイザック・ジャガードは、書籍出版業組合の登記簿にこの作品集に含まれる16本の芝居の出版権利を登記したが、そこには本の標題として“Mr. William Shakespeares Comedies, Histories, & Tragedies”と記載されている。これが扉表紙の標題と一致することから考えて、扉表紙の標題は出版業者側が最終決定したものだったと考えて間違いない。この登記がされた後、フォリオは比較的すぐに市場に出たことが分かっている。(出版責任者はブラウントで、本の印刷を請け負ったのがアイザック・ジャガードだった。ただし、フォリオの末尾に「出資者」として名前が挙げられているのは、同年10月下旬頃に亡くなるまでジャガード印刷所の実権を握っていたアイザックの父、ウィリアム・ジャガードである。)

側に渡したのかもしれない<sup>3</sup>。他方、ブラウントとジャガードは、印刷権利の問題やその他の事情によって役者から受け取った芝居の「すべて」を収録することはできないと判断したため、「すべて」という表現を避けたのかもしれない<sup>4</sup>。扉表紙の標題には「著作 (Workes)」という言葉も見えないが、それは大衆向けの娯楽にすぎなかった「芝居」を、目立つ扉表紙に堂々と「著作」と銘打って本を売り込むのは難しいと判断したからだろう<sup>5</sup>。一方、扉表紙だけに使われ、出版業者側の「戦略」を感じさせる一語がある。シェイクスピアの名前に冠された“Mr.”である。

ファースト・フォリオが売られた書店で本を求める人々の視野に最初に入り込んだのは、「主要な役者名」のページではなく、シェイクスピアの肖像の入った扉表紙と宣伝文句、そして、その紙面にある標題だった<sup>6</sup>。ブラウントとジャガードは、銅版画の製作（とおそらく扉表紙の印刷）をマーティン・ドルーシャウトに依頼しているが、ドルーシャウトは、版画の印刷工程で二度、肖像に微細な手直しを加えたことが分かっている (Blayney 18-19)。この事実も、扉表紙を人々の視覚に訴えることで、フォリオ版の芝居選集というこの前例のない本<sup>7</sup>を上手く売り込もうとするブラウントとジャガードの戦略的意図を窺わせるものである。扉表紙の標題は、日本では一般的に「ウィリアム・シェイクスピア氏の喜劇・歴史劇及び悲劇」と訳され<sup>8</sup>、“Mr.”を「氏」とするこの訳がシェイクスピア学者の間でも普通に使われている。しかし、指摘するまでもないが、この時代の“Mr.”は“Master (Maister と綴ることもある)”の短縮形であり<sup>9</sup>、「先生」、「師匠」、「名匠」、「親方」、「氏」、「様」、「君」、「殿」、「お坊ちゃん」等々と様々な意味で使われる敬称である (OED, “master” sb.<sup>1</sup>

<sup>3</sup> 一座が結成された当時から株主だったヘミングズとコンデルは、この頃は国王一座の財政を取り仕切る立場にあった。原稿を使用させることで、現代とは違い一度限りだったが約 50 ポンド (国王一座が活動の本拠地としていたブラック・フライアーズ座の一月分の家賃の約 8 割程度が支払える額) が一座に支払われたと推定される。ピーター・ブレインニーが推測するように、ファースト・フォリオの出版によって、その頃はすでに上演される機会が少なくなっていたシェイクスピアの芝居を舞台に復活させる用意があることを広く知らしめることができると考え、彼らはファースト・フォリオの出版企画に参画していたのかもしれない (Blayney 2)。いずれにせよ、出版業者と国王一座の目論見は決して同じではなかったと考えられる。

<sup>4</sup> ファースト・フォリオの前付けで最後に印刷された部分は、「作品目録 (A CATALOGVE)」であることが分かっているが、この「目録」の見出しは“A CATALOGVE of the seuerall Comedies, Histories, and Tragedies contained in this Volume”となっている。

<sup>5</sup> フォリオ版の本に芝居が収録されたのはシェイクスピアのファースト・フォリオが最初ではなく、1616年にベン・ジョンソン (Ben Jonson) が自分の『著作集 (The Workes of Benjamin Jonson)』を出版した際にいくつかの芝居を収録していた。このとき、当時は娯楽とみなされていた「芝居 (play)」をジョンソンが「著作 (Workes)」と呼んだとして、セントポール寺院境内の書店街に通う常連読者 (その中には敬虔なピューリタンの読者も多かった) から非難された。

<sup>6</sup> 当時の書店では扉表紙が店頭で飾られ、広告の役割を果たしていた。

<sup>7</sup> 芝居だけを収録した本がフォリオ版の形式で出版されたのは、ファースト・フォリオが最初である。

<sup>8</sup> 例えば、山田昭廣『仮面をとったシェイクスピア』(日本図書センター、1998)、p.278。

<sup>9</sup> OED は、“suffer the ij Mysters Bassetes to have accesse” (*Acts of the Privy Council of England*, vol 3 [1550-1552], 397) の用例 (“mister” sb.<sup>2</sup>) に言及し、16世紀にはすでに“mistə[r]”と発音されることがあったことを指摘しているが、それは不注意な話し言葉における例に限られ、記述された英語を読む際の正式な読み方ではなかった。ファースト・フォリオの前付けでは、ヒュー・ホランドがシェイクスピアを“Master WILLIAM SHAKESPEARE”と呼び、レナード・ディグスは“Maister W. SHAKESPEARE”と呼んでいる。

22)。シェイクスピアの時代には郷紳への敬称として用いられることもあった。

シェイクスピア家が紋章登録をした1596年以降は、シェイクスピアは正式に「マスター」と称される身分を得ていた<sup>10</sup>。しかし、その後、彼は、巨匠<sup>マスター</sup>の名に値する「詩人」<sup>11</sup>へと成長し<sup>12</sup>、また、国王一座の大株主（兼劇場の共同経営者）としても親方<sup>マスター</sup>と呼ばれるに相応しい地位を獲得した<sup>13</sup>。ただし、一座の若手役者がシェイクスピアを「マスター」と呼んだ記録は存在していない。要するに、1623年に出版された作品集のオーサー（author）として扉表紙を飾る「ウィリアム・シェイクスピア」を、ファースト・フォリオの出版者たちは「ジェントルマン」として描き上げようとしたのか、それとも「喜劇、歴史劇、悲劇」の「巨匠」として印象付けようとしたのか、あるいは劇場関係者にとっての「親方」として表象したかったのか、（日本はもとより英語圏においても）この点が曖昧にされている。ならば、私たちは今一度、ファースト・フォリオ受容の原点に立ち帰り、ブラウントとジャガードが戦略的に用いている（と考えられる）“MR. WILLIAM SHAKESPEARES”の意味を再考し、その正しい意味と訳し方について確認しておく必要があるだろう。

## 2. ファースト・フォリオ以前の版本においてシェイクスピアの名前に敬称が付けられた例

シェイクスピア家が紋章登録をした1596年からファースト・フォリオが出版されるまでに出された版本において、芝居本の扉表紙に印刷されたシェイクスピアの名前に敬称が用いられたことが、一度あった<sup>14</sup>。1608年にナサニエル・バター（Nathaniel Butter）が出版した『リア王』（印刷したのはニコラス・オクス [Nicholas Okes]）の扉表紙の標題が、“M. William Shak-speare: / HIS / True Chron-

<sup>10</sup> ストラットフォードの聖トリニティー教会の埋葬記録には、シェイクスピアの名前の後に“gent.”と記されている。

<sup>11</sup> 本稿でいう「詩人」とは、パトリック・チェニー（Patrick Cheney）のいう“Poet-playwright”のことである。シェイクスピア時代に「詩人（poet）」と「劇作家（playwright）」の概念に線引きがなかったことについては、Patrick Cheney, *Shakespeare, National Poet-Playwright* (Cambridge University Press, 2004) の第二章を参照されたい。

<sup>12</sup> ジョン・コールズ（John Quarles）が出版した『ルークリーズの凌辱』（1655）の標題紙では、シェイクスピアは“The incomparable Master of our English Poetry”とされている。

<sup>13</sup> 1593年に結成された宮内大臣一座は1599年に拠点グローブ座へ移したが、この時からシェイクスピアは劇場経営の筆頭株主の一人となった。1603年からは国王一座となった彼らは、1608年にブラック・フライアーズ座を主な活動拠点とするようになり、一座の経営体制が再び変化した。それまでは役者全員が株主であったのに対し、ブラック・フライアーズ座の経営にあたっては、シェイクスピアの他（ヘミングズとコンデルを含む）若干名が賃料の共同出資者となり、事実上の経営者となった。バート・ヴァン・エス（Bart Van Es）は、この経営体制の変化によって若い役者たちとシェイクスピア他の「親方」たちとの間に距離が生じたと推測している（259）。

<sup>14</sup> ジャガード印刷所がバターの名を偽って不正に再版したクォート（通称「バヴィア・クォート」[Q<sub>2</sub>, 1619]）は数えていない。

icle Historie...”(本文が始まるページの標題では“M. William Shake-speare”)となっている<sup>15</sup>。バターがどのような意図でシェイクスピアの名前に“M. (Master)”を付けたのか正確には分からないが、それは少なくともストラットフォードの郷紳となったシェイクスピアへの敬称ではなかったと思われる。バターの出版した本には、著者が貴族である場合には、名前の後に“servant to the Prince”や“Gent.”のような身分が記される傾向がみられる<sup>16</sup>。一方、バターがシェイクスピアの芝居として出版した『ロンドンの放蕩者』(1605)の扉表紙に印刷されたシェイクスピアの名前には“M.”という敬称はない。バターが『リア王』を出版した頃、新たにブラック・フライアーズ座の共同経営者となったシェイクスピアは、演劇界において「親方」的存在となっていたことから、『リア王』の扉表紙には“M.”という敬称が用いられた可能性は排除できない<sup>17</sup>。しかし、この“M.”は別の意味で使われた可能性が高い。

1612年に出版されたジョン・ウェブスターの『白い悪魔』(印刷したのは『リア王』と同じニコラス・オークス)の序文に“the right happy and copious industry of M. Shake-speare”という記載がある<sup>18</sup>。これは、バターの『リア王』以降、斯界(演劇界と書籍出版業界)<sup>19</sup>の一部の者たちからシェイクスピアが“M. Shake-speare”と呼ばれていたことを示唆している。ウェブスターにとってシェイクスピアは、間違いなく詩作の手本となる巨匠の一人だった。しかし、自身が劇団の経営にかかわることはなく自由人として生涯を送ったウェブスターが、大株主・劇場経営者としてのシェイクスピアの「偉業」に敬意を払う必要はなかっただろう。ウェブスターが使用する“M.”が、郷紳シェイクスピアへの(「様」と訳せる)敬称ではないことは次のことから明白である。同じ序文で、ウェブスターは、斯界の巨人たちの名をこのように列挙している。

...I haue euer truly cherisht my good opinion of other mens worthy Labours, especially of that full and haightned stile of Maister Chapman, The labor'd and vnderstanding workes of Maister Iohnson: The

<sup>15</sup> バターは1605年に『ロンドンの放蕩者』をシェイクスピアの芝居として出版しているが、この芝居本の作者名には敬称は付けられていない。他方、この敬称は、本の組版と印刷を請け負ったオークス(または彼の印刷所の職人)に由来した可能性は低い。書籍出版業組合登記簿には、1607年11月26日にバターとジョン・バスビー(John Busby)が行った出版権利登記が残っているが、そこに“Master William Shakespeare his ‘historye of Kinge Lear’ as yt was played before the kinges maiestie at Whitehall...”(Liber C, folio 161v)と記載されている。このことから、敬称はオークス(印刷所側)の判断によって付与された可能性は極めて低いと考えられる。

<sup>16</sup> 『私を見れば、私ができる』(1613)の扉表紙では、作者サミュエル・ローリーの名前の右脇に“servant to the Prince”と印字され、『ブレイン・ディーリング』(1624)の扉表紙では、作者トマス・レックフォードの名前の右脇に“Gent.”と印字されている。

<sup>17</sup> 注釈9を参照。

<sup>18</sup> “M. Shake-speare”という表記(綴り方)は、植字を担当したオークス(または彼の印刷所の職人)が用いたものである可能性が高い。

<sup>19</sup> 本稿でいう「斯界」とは、シェイクスピア時代に密接な関係にあった演劇界(識字層の観客を含む)と出版業界(本を求める識字層の読者や芝居通を含む)と関わりを持ち、ロンドンの書籍出版文化を支えていた人々によって形成される社会集団を意味している。公衆劇場の観客のうち出版された芝居本や詩の読者とはなりえない非識字層は含まない。

no lesse worthy composvres of the both worthily excellent Maister Beamont, & Maister Fletcher: And lastly (without wrong last to be named) the right happy and copious industry of M. Shake-speare, M. Decker, & M. Heywood, wishing what I write may be read by their light... (sig. A2v)

ウェブスターは、社会的身分や演劇界での地位にかかわらず、自らの詩作の手本となる詩人を「マスター」と呼んでいる。シェイクスピアが筆頭に挙げられていないことについて、エマ・スミス（Emma Smith）は「シェイクスピアの職人人生が終わるこの頃には、シェイクスピアは仲間の劇作家たちの中で比類のない存在でも、次世代の若者が敬意を払う唯一の存在でもなくなっていた」（*The Making* 60）と解釈している。事実、1612年頃には、出版界におけるシェイクスピアの人気は、1608年頃の全盛期と比べて衰えていた<sup>20</sup>。しかし、ここで注目すべきは、シェイクスピアがジョージ・チャップマンやフランシス・ポーモント&ジョン・フレッチャー等の人気のある若手詩人と同列に並べられ、その「思いのままにどんどん書き上げていく能力（the right happy and copious industry）」について特記して触れられていることだろう。シェイクスピアのこの才能は、ファースト・フォリオの「序文」でヘミングズとコンデルが「彼は思いのままに自然を模倣し」、そして、「思いついたことをいとも簡単に綴ることができた」と述べて賞讃したものと合致する。各々の詩人に特有の才能を看破する慧眼を有していたウェブスターは、シェイクスピアの人気が下降傾向にあっても、その技量へのオマージュとして（バター呼び方を踏襲して）“M.”を用いた可能性が高い。

同じ意味でシェイクスピアの名前に「マスター」が付けられた例として、1611年（正確な日付は不明）に出版されたジョン・デイヴィース（John Davies of Hereford）の『痴愚神非難』（STC 6341）に見える“To our English Terence M<sup>r</sup>. Will: Shake-speare”（76-77）、1614年に出版されたトマス・フリーマン（Thomas Freeman）の詩集に掲載された“To Master W: Shakespeare”と題された短詩（sigs. K2v-K3r）、そして、手稿本として残っているウィリアム・バス（William Basse）が書いた挽歌“On Mr. Wm Shakespare”（1616?）（Lansdowne MS 777, fol. 67v）がある。これらの詩に見える「マスター」は、それぞれの内容から判断して、詩作の「巨匠」という意味で使用されていると考えて間違いない。

### 3. 斯界におけるシェイクスピア像の変遷

郷紳となったシェイクスピアに対して「マスター」の敬称が用いられたこともある。しかし、それはロンドンの演劇界や出版業界とはかかわりのないストラットフォードとつながる人々が使う用例に

<sup>20</sup> 『ハムレット』の善本クォート版が1604/5年に出版されて以降、シェイクスピアの存命中にシェイクスピアの名を冠して新たに出版されたクォート版の芝居本は、1608年にバターの出した『リア王』の他はヘンリー・ウォリーが出版した『トロイラスとクレシダ』（1609）とヘンリー・ゴッソンが出版した『ペリクリーズ』（1609）の二本のみである。『トロイラスとクレシダ』（1609）は、様々な状況証拠からみて、売れ行きが悪くなかったと推定されている。『ペリクリーズ』は売れ行きが良かったが、買った人々の多くはこの芝居が（1608年以降に書かれたほとんどの「シェイクスピア作品」がそうだったように）「共作」であることを知っていたであろう。

限られていたようだ。1598年10月、故郷ストラットフォードの隣人で後に義理の息子となるトマス・クイニーの父親リチャード・クイニーが公務でロンドンを訪れていた際、30ポンドを借りる必要が生じたとき、クイニーはシェイクスピア宛に手紙を書いた<sup>21</sup>。その手紙には、“To my Loving good friend & countryman Mr. Wm Shakespeare”と書かれている(ER 27/4v)<sup>22</sup>。リチャードにシェイクスピアを頼ることを勧めたのは、リチャードの父エイドリアン(Adrian)であるが、エイドリアンが息子に宛てた手紙には“if you bargain with Mr Shakespeare or Receive money”(BRU 15/1/131r)とある。また、エイドリアンにシェイクスピアを紹介した町役人エイブラハム・スターリー(Abraham Sturley)が書いた手紙には“our countryman Mr William Shakespeare would procure us money”とある(BRU 15/1/136, fol. 1-2)。スターリーのこの手紙は「公文書」の性質を帯びたものであり、ここに名前が挙がっている他の人物たちにも、その身分に応じて“Sir”、“Mr”、“My Lady”等の敬称が付けられている。これらの手紙にみえる“Mr”は、郷紳の一員であるシェイクスピアへの敬称(「氏」、「様」、「殿」のように訳せる)である。1597年には由緒あるクロプトン家の大邸宅ニュー・ブレイスを買い受けたシェイクスピア家は、ストラットフォードの名望家となっていた<sup>23</sup>。

ここに表象されるシェイクスピアの人物像は、同じ頃にロンドンにおいて成型されつつあったシェイクスピア像とは一致しない。ロンドンのシェイクスピアの生活は、斯界の人々に慇懃とはほど遠い印象を与えていたと推測される。ロバート・グリーン『三文の知恵』(1592)で「成り上がり者のカラス」として揶揄されたシェイクスピアは、「その虎の心は役者の装いに包まれた」貪欲な「万屋(Johannes fac totum)」として描かれている(Greene 45-46)。この頃、シェイクスピアは『ヴィーナスとアドニス』の作者として頭角を現し、演劇界でも『ヘンリー六世・第一部』、『間違いの喜劇』、『タイタス・アンドロニカス』等の執筆にかかわっていたと推定されるが、ロンドンの貴族たちの好んだ無韻詩を難なく紡ぎあげる天賦の才能をすでに発揮し始めていたと思われる<sup>24</sup>。ヘンリー・チェトル(Henry Chettle)は、グリーンが描く「成り上がり者のカラス」について、「多くのやんごとなき方々がこの詩人の振る舞いは誠実なものだといっている——したがって、この人物は高潔だと考えられる——また、彼の詩は微細な部分にまで注意を払った優美なものだといっている——つまり、彼の技量を認めている」(A4r)といっている<sup>25</sup>。

<sup>21</sup> この手紙はシェイクスピアには届けられなかったと考えられている。

<sup>22</sup> クイニー父子とスターリーの手紙からの引用は、読みやすさを考慮して現代綴りにしている。

<sup>23</sup> シェイクスピアの遺言状には「紳士(gent.)」記され、没後に聖トリニティー教会に建てられた胸像が羽織る正服は、彼が「ストラットフォードの高位者(the Stratford dignitary)」だったことを物語っている(Nevinson 103)。

<sup>24</sup> 同じ箇所グリーンは、「[この御仁は]貴殿たちが書く最良の出来栄の無韻詩と同等のものを、自分なら仰々しい言葉で書き上げることができると思い込んでいる」と書いている。グリーンはこの文章を、三人の“Gentlemen”である芝居作者に宛てて書いている。

<sup>25</sup> 『三文の知恵』の冒頭でグリーンが自分自身を“Maister of Arts”と称していることを受け、チェトルが序文(“To the Gentlemen Readers”)でグリーンを“Mr. Greene”と呼んでいることは興味深い。グリーンを批判しシェイクスピアを賞讃するチェトルは、本当はシェイクスピアこそが“Maister”と呼ばれるに値する詩人だといわんとしているかのようである。

グリーンが看破した秘められた「虎」（＝野性）とチェトルの指摘する優美な詩を紡ぐ誠実で高潔な人物。—— E. A. J. ホニグマン（E. A. J. Honigmann）は、この背反的と見える人物像こそが、後にベン・ジョンソンがファースト・フォリオに寄せた頌詩（“To the memory of my beloued, the AVTHOR Mr. WILLIAM SHAKESPEARE”）で行ったシェイクスピア批評へと収斂していった、当時の斯界におけるシェイクスピア像の基調となっていた可能性を指摘している。ホニグマンは、グリーンが『イソップ物語集』の蟻と飛蝗の寓話を用いて自身を飛蝗に喩え、シェイクスピアを貪欲で「情け容赦のない蟻」に喩えている点に注目している（700）。その強かな貪欲こそが、シェイクスピアが宮内大臣一座が結成された1594年にはその株主となり、1596年には父ジョンの紋章登録を支援し、1597年にはニュー・プレイスを購入するという「成功」を成し遂げた所以だったことは間違いない。貴族的なグリーンがイソップの描く飛蝗のように慇懃な生活を送ったのに対し、シェイクスピアは蟻のように一途に“toil and thrift”を続けることで、着実に貴族社会に受け入れられていった。そうしたシェイクスピアに対してグリーンが羨望（“professional jealousy”）を抱いていた一方で、チェトルはシェイクスピアのありのままを書き綴ったのであって、二人の描く人物像は背反しないとホニグマンは分析している（700-01）。ストラットフォードの“Mr. William Shakespeare”は、ロンドンでは、彼の詩作の庇護者となる貴族たちと交わりつつも、自身は「万屋」として、ただひたすら詩の才能を発揮する場を求め続けていたと思われる（グリーンは貴族的感覚では、公衆劇場は若い「詩人」が本領を発揮すべき場所ではなかったのかもしれないが、「万屋」は体裁を気にしなかった）。ストラットフォードの有力者たちがシェイクスピアに書簡を送っていた頃、シェイクスピアの名前は、出版された芝居本の扉表紙を飾るようになっていた<sup>26</sup>。そして芝居本も、詩と同様に良く売れるようになった。ケンブリッジとオクスフォードの両大学にて“Maister of Arts”を修めた文壇の大御所フランシス・ミアズ（Francis Meres）は、シェイクスピアをオヴィディウスに喩え、シェイクスピアの技量をこう褒めちぎった——「ローマではプラウトゥスとセネカがそれぞれ喜劇と悲劇において最も素晴らしいというなら、イギリスではシェイクスピアがその両方において最も素晴らしい」（sig. Oo2r）。

#### 4. ベン・ジョンソンとレナード・ディグス

ベン・ジョンソンがファースト・フォリオに寄せた頌詩は、野性の「靈感（rage）」を貴族好みの優美な様式へと昇華できるシェイクスピアの技量について言及している。ジョンソンは、シェイクスピアを「エイヴオン川の白鳥」、「時代の魂」、「ジェントルなシェイクスピア」と呼び、さらには、ジョン・リリー、トマス・キッド、クリストファー・マーロウをも凌駕しているといってその洗練された詩を賞讃する。一方で、「貴兄はラテン語を学ばず、ギリシャ語はさらに得意ではなかったが…」と書いてシェイクスピアの才能が学殖によるものではないことを強調した上で、こう締めくくっている。

<sup>26</sup> 現存する史料によると、シェイクスピアの名前が芝居本の扉表紙に現れるようになったのは1598年からである。

Shine fourth, thou Starre of Poets, and with rage,  
Or influence, chide, or, cheer the drooping stage.

(詩人の道標である星よ、ここに貴兄の輝きを放ち、  
その靈感か靈液で、萎えゆく演劇界を叱咤激励してくれ給え。)

自然由来の「靈感か靈液 (rage, / Or influence)」と貴族好み<sup>デコラム</sup>の詩形式とのバランス、あるいは前者を後者に昇華できる技量について、ホニグマンは、それこそが『ヴィーナスとアドーニス』(c. 1580s)から『リア王』(1605)<sup>27</sup>までの作品に通底するシェイクスピア独自のものと述べている。1593年に若き第3代サウサンプトン伯ヘンリー・リズリーに捧げられた『ヴィーナスとアドーニス』は、その前半部で、美しい青年アドーニスが愛神ヴィーナスに口説かれる過程を描いているが、ホニグマンによると、この詩には、かつて(シェイクスピアが当時のリズリーと同じ年齢だった頃)アドーニスのような「思春期の青年」<sup>28</sup>だったシェイクスピアが年上の成熟した女性アン・ハサウェイとの婚外交渉に至った経験が戯画化して投影された可能性が高いという。無垢な(と少なくとも自分ではそう信じようとする)青年が、女の口説きによって自らの内にある野性を発見しそれを拒む(ホニグマンの解釈)というそれまで英詩が扱ってこなかった斬新な題材を貴族好みのデコラムへと昇華させたこの詩が、若きリズリーの心を掴んだことは容易に想像できる<sup>29</sup>。

シェイクスピアが実人生の経験から「靈感か靈液」を得て、自身の“self-portrait”(Honigmann 710)を描いたと推定されるもう一作品は、『リア王』であるという。ホニグマンの推定によると、リア王伝説は、母親(アン・ハサウェイ)に似ていて父親と馬が合わなかったジュディスとその味方となった母親、そして、父親との距離が近かった長女サンナ<sup>30</sup>という、家庭内における三人の女たちとの関係性の中で、シェイクスピアは自らの心のうちに垣間見えていた「それまで蓋をして避けてきた感情領域」に踏み込み、そこに眠る「虎」の野性を解き放った(711)。「ジェントルなシェイクスピア」という装いに包まれた野性こそ、ジョンソンのいうシェイクスピアの「靈感か靈液」であるとホニグマンは考えている。

ジョンソン自身は、ジョン・ドライデン(John Dryden)が「すべてにおいてギリシャやローマの

<sup>27</sup> 『ヴィーナスとアドーニス』と『リア王』の創作年代は、ホニグマンの推定による。

<sup>28</sup> アーデン版(第3版)の『シェイクスピア詩集』の編者(Katherine Duncan-JonesとH. R. Woudhuysen)の解説に代表される「一般的」な解釈では、ヴィーナスの口説きに反応を示さないアドーニスを思春期に達しない「少年(a boy)」とされるが、ホニグマンはアドーニスを思春期の感情に「困惑して苦悶(confused and baffled)」する青年として捉えている。また、ホニグマンは、ヴィーナスがそうした思春期の心理状況を看破した上でアドーニスを口説いていると解釈している(Honigmann 704-05)。

<sup>29</sup> ホニグマンは触れていないが、大英図書館が所蔵する『チャーサー作品集』(1598)にガブリエル・ハーヴェイ(Gabriel Harvey)が書き残している“The younger sort takes much delight in Shakespeare’s Venus, & Adonis...”(MS 42518, fol. 422v)という記述から、この詩が若い識字層(一般的に平民は本が読めなかったので主に若い貴族)の間で人気を得ていたことが分かる。

<sup>30</sup> ホニグマンは、1616年3月15日にシェイクスピア自身が行った遺言状の改訂の内容やサンナの墓に記された碑文などの資料から、そのように推測している。



古典を重視し…公然とホラーティウスの真似をするばかりではなく、他のあらゆる古典詩人にも学び、そして盗んだ」（25）と評したように、シェイクスピアとは対照的に徹底的に古典に倣った。ウェブスターが彼の芝居を「苦勞して書いた〔古典に〕よく通じた著作（The labor'd and vnderstanding workes）」と呼んだのも、古典に倣おうとするジョンソンの不斷の努力を評していったことである。後にジョンソンは、古典の知識がない（と彼が考える）シェイクスピアを「自力任せに思い付きを書いてしまうが、同様に規範に倣うこともしてほしいものだ」と批判し、また、別の場所では、「シェイクスピアには技量（Art）が足りない」と批判している（583: viii, 133: i）。ファースト・フォリオの頌詩では、シェイクスピアの「靈感」を賞讃する一方で、「自然（Nature）こそ詩人の関心事、／しかし、それを形にするのは詩人の技量（Art）だ」といい、「良い詩人とは、生まれながらにしてそうであることもあるが、〔努力によって〕成型されるものだ（a good Poet's made, as well as borne）」と述べて、シェイクスピアの詩の技量について辛辣なコメントをしている。

しかし、当時の文壇において「英語を極めた偉大な巨匠（a great master of the English language）」（Wood 593）として知られていたレナード・ディグス（Leonard Digges）は、ジョンソンの考えを正した<sup>31</sup>。ファースト・フォリオにも賞讃詩を寄せていたディグスは、彼が没してからJ・ベンソン（Benson）が出版したシェイクスピアの『詩集』（1640）に序文として掲載された長文の賞讃詩（書かれたのは1623年から1632年頃と推定される）において、「詩人とは成型されるものではなく、生まれるものだ（Poets are borne not made）」と切り出している。そして、フォリオに寄せられたジョンソンの頌詩に宛てつけながら、シェイクスピアの技量についてこう述べている。

Art without Art unpareleld as yet.

Next Nature onely helpt him, for looke thorow

This whole Booke, thou shalt find he doth not borrow,

One phrase from Greekes, nor Latines imitate. . . (sigs. 3r-4r)

（技巧を必要としないその比類なき技量。

それを支えるのは、描かれた自然のみ。

シェイクスピアはギリシャ人の言葉を一つも借用せず、ローマ人を真似てもいないと、この本を一読すれば、お分かりいただけよう。）

ジョンソンとディグスの見解の違いは、ホラーティウスが「技術」と「才能」の関係について説いている『詩論』295-96行及び408-09行の解釈の違いによる。ホラーティウスの『詩論』は17世紀初頭にはまだ英語の定訳はなく、ジョンソンの解釈（“a good Poet's made, as well as borne”）は、当時

<sup>31</sup> この賞讃詩は、もともとはファースト・フォリオに掲載するために書かれたが、ジョンソンへの辛辣すぎる批判が含まれていたため陽の目をみなかったと広く考えられている（Bertram 261n）。フリーヘイファーは、この詩はもともとセカンド・フォリオ（1632）のために書かれていた可能性が高いと考えている（Freehafer 67）。

流布していた英訳の一つであるウィリアム・ウェブの解釈 (“A Poet is as well borne as made a Poet”) に基づくものだった (Freehafer 69)。ディッグスの “Poets are borne not made” は、ホラーティウスのラテン語を彼自身が英訳したものである。ディッグスの見立てでは、シェイクスピアの自然 (Nature) を描く天賦の才能こそが彼の技量 (Art) であり、ジョンソンのように規範通りの技巧 (Art) を必要としなかったシェイクスピアこそ、ホラーティウスの言葉を体現した詩人だった。ファースト・フォリオに寄せた賞讃詩 (“TO THE MEMORIE of the deceased Authour Maister W. SHAKESPEARE”) において、ディッグスは、シェイクスピアを失った演劇界を「廃頹した演劇界」と呼び、さらに、シェイクスピアは「月桂樹を戴いて、永遠に生きる」と褒めちぎっていた。

## 5. まとめ

ファースト・フォリオが出版された頃の斯界（特に出版業界）において、ディッグスのシェイクスピア観が、特に斬新だったわけではない。イートン校でギリシャ語を教えたジョン・ヘイルズ (John Hales) は、「過去の詩人が書いたあらゆる題材も、シェイクスピアの作品ではもっと上手に描かれている」と述べたと伝えられ (Dryden 68)、トマス・フリーマン (1614) は「我武者羅の若い詩人たちは / テレンティウスがプラウトゥスやメナンドロスを真似た以上に他者を真似るが、 / [シェイクスピアよ!] 汝を正しく賞讃するのに、他の詩人は必要ない」(sig. K3) と書き残している。かつてミアズがオヴィデウスと並べて賞讃した詩人は、没後7年の時を経て、劇場に通う多くの人々にとっては過去の詩人 (“the deceased Authour”) となっていたとしても、書籍出版とかかわる人々の間ではその時代を生きる者たちの規範となる「名匠」 (“Maister W. SHAKESPEARE”) として語り継がれていたと推測できる。

ファースト・フォリオの出版企画が進んでいた頃、エドワード・ブラウントはディッグスと親密な関係を築いていた。ディッグスが翻訳したクラウディウスの『プロセルピナの凌辱』(1617) を出版したのは、ブラウントだった。ファースト・フォリオに賞讃詩を寄せたもう一人の文士ジェームズ・マップ (James Mabbe) は<sup>32</sup>、ディッグスの親友であったばかりではなく、当時は外国文学の翻訳を多く出版していたブラウントの常連客であり、また彼の翻訳者でもあった<sup>33</sup>。つまり、ファースト・フォリオの構想と扉表紙の図案を含めた「戦略」について、ブラウントが彼らに何も相談しなかったとは考え難い。扉表紙の標題が決定していったプロセスには、直接または間接的に、ディッグスとマップがかかわっていたと考えるのが最も自然だろう。シェイクスピアをそれまでの「ウィリアム・シェイクスピア」ではなく、ギリシャ・ローマの古典をも凌駕した “Master William Shakespeare” として売り出すことで、劇場関係者や詩人、文人たちの興味に語りかけようとしたに違いな

<sup>32</sup> マップスの賞讃詩 (“To the memorie of M. W. Shake-speare”) にも「マスター」の敬称がある。

<sup>33</sup> ブラウントの書店 (セントポール寺院境内にあったザ・ブラック・ベアという店) にはイタリア文学やスペイン文学の翻訳本が多く並んでいた。オクスフォード大学出身の文士マップは、ブラウントが出版したマッテオ・アレマンの小説『グスマン・デ・アルファラーチェの生涯』(1623) の翻訳者であった。

い。ジャガードとブラウントは、フランクフルト書籍見本市の『1622年4月から10月までに出版された本の目録』（英語版）に、1622年10月までに出版される見込みなどまったくなかったファースト・フォリオを、“Plays, written by M. William Shakespeare, all in one volume, printed by Issac Jaggard, in fol.”として宣伝している（Blayney 8）。ジャガードとブラウントが事実を偽ったこの「事前広告」を出した理由は分かっていないが、その時はまだ考案中だった標題への市場の反応を窺おうとしたのかもしれない<sup>34</sup>。

いずれにせよ、結果として、過去の詩人に付与された“Master William Shakespeare”という新たなイメージは市場の潮流にうまく乗ったといえる<sup>35</sup>。王政復古後のロンドンにおいて、ジョン・ドライデンやチャールズ・ギルドンの批評言説の中で、シェイクスピアが英語文学における規範的詩人とされ、“the National Poet-Playwright”または“the Bard”のイメージが大衆化していったことは、今さら述べる必要はないだろう<sup>36</sup>。出版界一のやり手ジェイコブ・トンソンがときの桂冠詩人ニコラス・ロウを「校訂者」とする新しい『シェイクスピア著作集』を出版したときも、その標題紙に大きく印字されたシェイクスピアの名前には“Mr”が残された。その後、18世紀の校訂版ではしだいに“Mr”の敬称が使用されなくなっていったが、代わって「シェイクスピア著作集」のように「著作集（Works）」という語がごく普通に用いられるようになった。これは、シェイクスピアが、“the deceased Authour Maister W. SHAKESPEARE”として広く認識されたことを意味するのではないだろうか。

日本でも、明治時代から大正時代の初期までは、シェイクスピアは「沙翁」と呼ばれていた。この「翁」が落ち、「シェークスピヤ」や「シェークスピア」として標記されるようになったとき、シェイクスピアは「英文学」の最高峰に君臨する「名匠」と認識され、西洋化／近代化の時代を生きた文士たちは競ってその作風を学んだ。こうしたことを念頭に置くなら、ファースト・フォリオの扉表紙の標題は、現代においては、“Mr.”を「名匠」の意味に解釈して、「名匠ウィリアム・シェイクスピアの喜劇、歴史劇、及び悲劇」と訳するのが妥当である。

<sup>34</sup> ファースト・フォリオが出版された後に出された1624年版の『目録』では、“Maister Shakespeares workes, printed for Edward Blount, in fol.”となっている（Blayney 26）。“Playes”から“workes”に変わったことで、シェイクスピアのイメージは芝居作家から文士へと変化している。アダム・フックス（Adam G. Hooks）は、芝居の公告ピラの印刷を専門としていたジャガード印刷所側はフォリオを「芝居集」として認識し、一方のブラウントの書店側では文士の「著作集」と認識していた可能性があると考えている（101）。

<sup>35</sup> 1632年のセカンド・フォリオ以降も、扉表紙の名前には“Mr”の敬称が付けられている。1634年にシェイクスピアとフレッチャーの共作として出版された『血縁の二公子』（出版したのはジョン・ウォーターズ）の標題は、作者を“Mr. John Fletcher, and Mr. William Shakespeare. } Gent.”としている。ベンソンが編集した『詩集』（1640）では、“Gent.”であり“Mr.”でもある詩人のイメージを、正装して手には月桂樹を握ったシェイクスピアの肖像画を本の扉に入れることで視覚的に表現している。

<sup>36</sup> “Poet-playwright”のイメージを広く大衆に普及させたのはギルドンである（Cannanを参照）。

## 引用文献

- Bertram, Paul. *Shakespeare and The Two Noble Kinsmen*, Rutgers University Press, 1965.
- Blayney, Peter W. M. *The First Folio of Shakespeare*. Folger Library Publications, 1991.
- Basse, William. "On Mr. Wm Shakespeare." British Library, London, Lansdowne MS 777, fol. 67v.
- Cannan, Paul D. "Early Shakespeare Criticism, Charles Gildon, and the Making of Shakespeare the Playwrite-Poet." *Modern Philology*, vol. 102, no. 1, Aug. 2004, pp. 35-55.
- Cheney, Patrick. *Shakespeare, National Poet-Playwright*, Cambridge University Press, 2004.
- Chettle, Henry. "To the Gentlemen Readers." *Kind-harts Dreame*. London, [1593?], Folger Shakespeare Library, Washington DC, STC 1523, sigs. A3r-A4v.
- Davies, John. "To our English Terence M<sup>r</sup>. Will: Shake-speare." *The Scourge of Folly*. London, n. d. (1611?), STC 6341, pp. 76-77.
- Digges, Leonard. "Upon Master William Shakespeare, the Deceased Author, and his Poems." *Poems: Written by Wil. Shakespeare. Gent*. London, 1640, sigs. 3r-4r.
- Dryden, John. *An Essay of Dramatic Poetry*. 1668. Edited by Thomas Arnold, The Clarendon Press, 1926.
- Freeman, Thomas. "To Master W: Shakespeare." *Rubbe, and a Great Cast. Epigrams*, London, 1614, sigs. K2v & K3r.
- Greene, Robert. *Groats-Worth of Witte*. 1592. Edited by G. B. Harrison, The Bodley Head Quartos, 1923.
- Freehafer, John. "Leonard Digges, Ben Jonson, and the Beginning of Shakespeare Idolatry." *Shakespeare Quarterly*, vol. 21, no. 1, Winter 1970, pp. 63-75.
- Hinman, Charlton, editor. *The First Folio of Shakespeare*. 2nd ed., introduction by Peter W. M. Blayney, W. W. Norton, 1996.
- Honigmann, E. A. J. "Tiger Shakspeare and Gentle Shakespeare." *The Modern Language Review*, vol. 107, no. 3, Jul. 2012, pp. 699-711.
- Hooks, Adam G. *Selling Shakespeare: Biography, Bibliography, and the Book Trade*. Cambridge University Press, 2016.
- Jonson, Ben(jamin). *Ben Jonson*. Edited by C. H. Herford and Percy & Evelyn Simpson, Clarendon Press, 1925-53. 11 vols.
- Meres, Francis. *Palladis Tamia*. London, 1598.
- Nevinson, J. L. "Shakespeare's Dress in His Portraits." *Shakespeare Quarterly*, vol. 18, no. 2, Spring 1967, pp. 101-06.
- Quiney, Adrian. "Miscellaneous Documents: Stratford-upon-Avon Corporation." Ca. 4 November 1598. The Shakespeare Birthplace Trust, Stratford-upon-Avon, BRU 15/1/131. See *Shakespeare Documented*, <https://doi.org/10.37078/442>.
- Quiney, Richard. "Quiney Letter." 25 October 1598. The Shakespeare Birthplace Trust, Stratford-upon-Avon, ER 27/4. See *Shakespeare Documented*, <https://doi.org/10.37078/123>.
- Shakespeare Documented*. Folger Shakespeare Library, <https://shakespearedocumented.folger.edu/>.
- Shakespeare, William. *Shakespeare's Poems*. The Arden Shakespeare Third Series. Edited by Katherine Duncan-Jones and H. R. Woudhuysen, Bloomsbury, 2007.
- Smith, Emma. *The Making of Shakespeare's First Folio*. Bodleian Library, 2015.
- Sturley, Abraham. "Miscellaneous documents: Stratford-upon-Avon corporation." 4 November 1598. The Shakespeare Birthplace Trust, Stratford-upon-Avon, BRU 15/1/136, fol. 1-2. See *Shakespeare Documented*, <https://doi.org/10.37078/441>.
- Van Es, Bart. *Shakespeare in Company*. Oxford University Press, 2013.
- Webster, John. *The White Diuel*. London, 1612.

Wood, Anthony A. *Athenae Oxonienses*. Vol. 2. Edited by Philip Bliss, London, 1815.

ホラーティウス。「詩論」。松本仁助、岡道男訳『アリステレース詩学・ホラーティウス詩論』。岩波文庫。岩波書店, 1997, pp. 223–310.

山田昭廣。『仮面をとったシェイクスピア』。日本図書センター, 1998.

## 【Abstract】

## The Accurate Japanese Translation of the “MR.” Prefixed to William Shakespeare’s Name in the Front-page Title of the First Folio (1623)

Hirohisa IGARASHI\*

The title printed on the front page of Shakespeare’s First Folio (1623) presents the name of “the deceased Authour” as “Mr. WILLIAM SHAKESPEARES . . .” rather than “William Shakespeare,” the form which appears in the book’s alternative title (“The Workes of William Shakespeare”) printed on the second title-page. The front-page title (with “Mr. [Master]” added) was probably conceived by the stationer (Edward Blount) and the printer (Isaac Jaggard), while the latter title was given by Shakespeare’s fellow actors, John Heming(s) and Henry Condell. While many people mistakenly construe the “Mr.” as an equivalent of the modern “Mister,” it was likely meant to imply Shakespeare’s worthiness as the “Maister” of English poetry and was shrewdly incorporated in the title created by the publishers for promotional purposes.

**Key words :** First Folio, Title-page, Mr. WILLIAM SHAKESPEARES, Mister, Master/Maister

シェイクスピアのファースト・フォリオ（1623）の扉表紙に印刷されたシェイクスピアの名前は“Mr. [Master]”という敬称を冠して、“Mr. WILLIAM SHAKESPEARES…”となっている。今日では、この“Mr.”が「氏」と訳されるのが一般的となっているが、厳密にいうと、この訳は正しくない。この“Mr.”は、「氏 (Mister)」ではなく「名匠」という意味で使用されていると考えられ、フォリオを出版した二人の出版業者（エドワード・ブラウントとアイザック・ジャガード）が、世間ではすでに「死せる詩人 (the deceased Authour)」となっていたシェイクスピアに新たなイメージを付与することでフォリオを売り込もうと、戦略的に用いたものである可能性が高い。本稿では、「シェイクスピア」が「名匠シェイクスピア／沙翁」へと変化していった過程をたどりながら、「氏」という訳の問題点を指摘し、さらに、ブラウントとジャガードのイメージ戦略がいかに当時の潮流に乗り、功を奏したと考えられるのか考察しておきたい。

キーワード：ファースト・フォリオ、扉表紙、シェイクスピアの敬称 (Mr.)、氏、名匠／翁

---

\* A professor in the Faculty of Food and Nutritional Sciences, and a research fellow of the Institute of Human Sciences at Toyo University